

健康ニュース愛され500号

仙台市青葉区桜ヶ丘の宮川薬局が月1回発行する無料情報紙「宮川薬局健康ニュース」が1月、500号に達した。薬剤師宮川季士さん(72)が「地域住民に健康に関する正しい知識を」との思いで42年にわたり作っている。

仙台・桜ヶ丘 宮川薬局 月1回42年

宮川さんは京都市出身。東北薬科大(現東北医科薬科大)卒、同大大学院修了。京都の実家を手伝った後、1983年10月に現在地に開局し、翌年4月に健康ニュースの発行を始めた。

当初は家庭用印刷機でB5判の紙に約300部を印刷し、薬局を訪れる人に配った。現在は一回り大きいA4判で、ネット印刷を活用して約2000部を発行。毎月第3水曜に河北新報夕刊に折り込み、桜ヶ丘団地を中心に配布する。費用は自分で負担している。

商品の紹介などは一切しない。薬品メーカーから送られるニュースリリースを参考に「下は水虫から、上は認知症まで」(宮川さん)、体に関する話題を満遍なく取り上げる。

500号となった1月号のテーマは「ドライアイ」「緑内障」

イラスト入り 分かりやすく



「地域のために発行を続ける」と話す宮川さん(右)と妻恵美さん。恵美さんは健康ニュースにコラムを載せている

「スマホ老眼」。症状や原因、予防法をイラスト入りで解説した。発行を休んだのは趣味のスキーで転び、大けがをした時の1回だけ。「やめようと思ったことは何度もある」というが、その度に住民の励ましが支えにな

った。「いつも楽しく読んでいます。ためになることが多く勉強になります」とのメモ書きが、家の郵便受けに入っていたこともある。

宮川薬局は、住宅地にある、いわゆる相談薬局だ。症状だけでなく、食事内容や生活習慣を聞いて薬を個別に調合・処方したり、市販薬を薦めたりする。

「街の薬局として地域から信頼されているのありがたい」と宮川さん。地域還元の意味を込めて、これからも情報紙の発行を続ける考えた。

「健康ニュース」は宮川薬局でもらえるほか、同薬局のホームページで閲覧できる。

(佐藤克弘)